

「日本靈異記」訓釈試論(九)

我妻多賀子

(九)、タタハシク

興福寺本「日本靈異記」上巻第一縁に左のような訓釈がある。

偉 大々波之□ (上巻・一)

右のうち□で記した、いわゆる空白の部分は、語尾が省略されたもののようにも思われるが、同じ個所が国立国会図書館本や群書類従本では、それぞれ「多々皮之久」「タ、波シク」となっている。つまり、□の部分は原文が破損して読みにくい状態にあるところで、語尾省略の例とは考えられない。△注1▽よって、この訓釈はタタハシクとよむことで、まず問題はないものと思われる。

さて、今回は、このタタハシクという現代では余り耳にしない語を取りあげて、その意味・用法の変遷などをながめてみることにしたい。

「日本靈異記」には、もう一個所、中巻第二十五縁にこの語が出て来るが、そこでは、国立国会図書館本に左のような訓釈がつけられている。

偉 タ、ハシク (中巻・二十五)

それではまず、「日本靈異記」に見られたこの二個所の原文を書き下し文にして記し、この場合のタ、ハシクの意味を探ってみることにしよう。△注2▽

①時に雷光を放ち明(て)り炫(かかや)けり。天皇

見て恐り偉シク幣帛（みてくら）を進（たてまつ）り落ちし處に還さ令（し）めしかば今に雷（いかづち）の岡と呼ぶ。（上巻・一）

②讃岐の国山田の郡に布敷臣衣女有り。聖武天皇の時代に衣女忽（にはか）に病を得たり。時に偉シク百味を備けて門の左右に祭り疫神に賂（まひな）ひて饗（あへ）す。（中巻・二十五）

①は「（少子部（ちいさこべ）の栖軽（すがる）が持ち運んで来た）雷の明るく光り輝くのを見て恐れをなした天皇が十分に供え物をさゝげて雷を落ちたところに返させなされたので、現在ではそこを雷の岡と呼んでいる」という内容の文章で、タタハシクは「十分に、たくさん」と解釈することができる。②の方は「急に病気になるった布敷臣衣女のために十分に山海の珍味をととのえて門の両側に置き疫病神に贈物をしてご馳走した」と訳せるので、これまた、タタハシクは「十分に、存分に」という意味にとれる。

そして右の二例は、いずれも漢字の「偉」を親字とし、タタハシクという形容詞の連用形でよんでいる点、および何かを恐れて祈願した人が供え物をした際に、その供え方がタタハシキ状態であったという点で、意味・用法ともに非常によく似ている。

以上が「日本靈異記」に見られたタタハシクの例であるが、上代の文献では他に「日本書紀」と「万葉集」にこの語の用例が出て来たので、以下作品別に考察を加えてみることにしたい。初めに、「日本書紀」に見られたタタハシクは左の二例である。△注3▽

③天皇風姿（みやびすがた）岐嶷（いこよか）なり。少（をさな）くして雄拔（をを）しき氣（いきさし）有（ま）します。壮（をとこざかり）に及（いた）りて容貌（みかたち）魁（すぐ）れて偉（たたは）し。（綏靖前紀）

③是の小確尊は亦の名は日本童男（やまとをぐな）。亦は日本武尊（やまとたけるのみこと）と曰す。幼（わか）くして雄略（をを）しき氣有（ま）します。壮に及びて容貌（みかた）魁（すぐ）れ偉（たたは）し。（景行紀二年三月）

いずれも「日本靈異記」と同じ漢字の「偉」につけられた訓であるが、その意味は「日本靈異記」の場合のよくな「十分に、たくさんに」というのでは通じない。

③は綏靖天皇の様子を述べたところで「男の最盛期すなわち青壮年期になって、その容貌が魁偉である」と記している。「魁偉」は「魁梧」とか「魁壯」に同じく「からだが大きくて立派なこと」を示す漢語で、それに

「スグレテタタハシ」という訓がつけられているのであるから、タタハシは「充実してたくましい」という意味を有する語と受けとれる。④は綏靖天皇が日本武尊に代わっただけで、③と文章が同一である。よって、タタハシは③と同じく「充実してたくましい」とか「はちきれそうに力があふれている」などと訳すことができよう。

この二例は、漢字の「偉」をタタハシという形容詞の終止形でよんでいるところ、および小さい頃から勇ましかった一人の男性に対して、青壮年期になるといっそうすぐれて充実したくましくなると、その容貌を述べているところなど、意味用法がよく似ている。先の「日本靈異記」でもタタハシクの二例は用法が非常によく似ていたが、この「日本書紀」でもまた、二例のタタハシが全く同一といっているほど意味・用法ともに酷似している点に注目したい。

では、つづいて「万葉集」に見られた二例のタタハシクをながめてみることにしよう。△注4▽

⑤……わご王（おほきみ）皇子の命（みこと）の天の下知らしめしせば春花の 貴（たとふ）からむと望月の 満波之計武跡（たたはしけむと）天の下四方の人の 大船の思ひ憑（たの）みて天つ水 仰ぎて待つにいかさまに思はしめせか……

（巻二・一六七）

⑥……行き向ふ年の緒長く 仕へ来し君の御門（みかど）を天の如 仰ぎて見つつ畏（かしこ）けど思ひたのみて何時しかも 日足らしまして十五月（もちつき）の 多田波思家武登（たたはしけむと）わが思ふ 皇子の命は春されば殖槻（うゑつき）が上
の 遠つ人松の下道（したぢ）ゆ 登らして国見あそばし……
（巻十三・三三二四）

右の二例は、両方とも長歌に見られるもので、量的にかなり長いため、いずれもタタハシクの使用されている部分のみを引用した。

⑤は日並皇子尊（草壁皇子）の薨去を悼んで柿本人麿がうたった長歌で、引用したところは「この皇子（日並皇子）が天下をお治めになるのだったら春の花のように貴いであろうにと満月のように満ち足りて盛んであるうにと四方の人らが頼みにし早天に慈雨を待つように仰いで待っていたのに（日並皇子は）何とお思いになってか」と訳すことができる。そして、タタハシクはこゝではタタハシケムトという形で使用されている。これは形容詞タタハシクの未然形タタハシケに、推量の助動詞ム、更に助詞のトがついたもので、先の傍線部分のように解釈することができる。つまり、タタハシだけでは「満ち

足りて盛んである」という意味になり、これまで見て来た「日本靈異記」や「日本書紀」の例とは、また一寸意味が異なっている。⑥は、藤原の宮時代に亡くなられた何人かの皇子の命のうち高市皇子のことをうたったものと言われているが、引用部分は「送り迎える年月も長くお仕えて来た君の御門を大空のように仰ぎ見、恐れ多いけれども心にたのみにして何時になったら皇子様が生長され満月のように満ち足りて御立派になられるだろうと思つて来たその皇子様は春になると殖槻のあたりの松の下道から丘にお登りになって国見をなさり……」と訳すことができる。つまり、ここでもタタハシは、⑤と同じく「満ち足りて盛んである」の意で使われている。またこの⑤と⑥は、意味ばかりでなく、用法的にも、タタハシケムトという形で出て来ること、望月の（十五夜の月のように）という枕詞ともとれる語句がすぐ上に来ていること、更に、皇子の薨去を悲しんでうたった長歌の中で使用されていることなど共通部分が多い。つまり、「万葉集」に見られた二例のタタハシも、これまた、きわめて類似した用法のものであるといえる。

以上、八、九世紀にかけて成った「日本書紀」「万葉集」「日本靈異記」の三文獻でタタハシという語を調べたところ、それぞれ用例が二つ出て来て、しかもその二

例が、各文獻ごとに、意味的にも用法的にも非常によく似たものであるという興味深い結果が得られた。

尚、タタハシが三つの文獻に見られたことは、この語が地の文だけでなく、歌にも用いられる語であったことを意味している。また、形式的にタタハシク、タタハシ、タタハシケムトの三つが出て来たことは、形容詞タタハシが、終止形としてばかりでなく、未然形や連用形としても使われていたということになる。意味的には「十分に、存分に」「充実にたくましい」「満ち足りて盛んである」と三文獻で少しずつ違いが見られたが、これらに共通して考えられる意味は「いっぱい満ちている、満ち足りた」ということにでもなろうか。なぜ、このような意味が出て来たかという点、形容詞タタハシが、大方の通説のように、動詞のタタフから派生した語であることを考慮に入れば納得が行く。そこでまず、これ以上タタハシについて言及する前に、動詞のタタフについてながめてみることにしたい。

動詞のタタフは、「類聚名義抄（観智院本）」では

湧、汎、洋、瀆、智、濤、湛、潢、汙、混

また、「色葉字類抄」では

湛、溢、漲、海、湧、洋

などの漢字にあてられた訓である。

そして、このタタフは、室町時代頃から転じてタタクとなり、特に終止形は多くの場合タタユルの形をとっていたことが、左に記す辞書の例から考えられる。

湛 タ、ユル 涓同 (文明本節用集)

Tataye, uru, eta タタエ、タタユル、エタ

(湛へ、ゆるへた) 溢れこぼれる

(日葡辞書)

湛 たん、た、ゆる、せく (落葉集)

タタフもタタクも、共にその親字は^レ(さんずい)のついたものがほとんどなので、これらは水に関する場合に使われていた語と判断される。そしてこのことは、左に記すように、実際の文献に出て来るタタフの例から見ても明らかである。

① 月日経るままにたゞ涙の海をたたへてるたり

(宇津保物語・俊隆)

② 池の水のたゝへたる木のしたにかがりびに、みあかしの光あひて、ひるよりさやかなるを……

(紫式部日記)

③ 山をたたみ池をたたへしめ給へるを……

(栄花物語・駒競)

④ 国ノ内ニ池ヲ令堀メテ水ヲ湛ヘテ……

(今昔物語・十ノ三三)

⑤ 潮ノ水ヲ湛へ汲ミ入レタリケレバ…… (今昔物語・二十四ノ四六)

⑥ 潮ノ水ヲ汲入テ池ニ湛ヘタリケリ (今昔物語・二十七ノ二)

⑦ 陸奥の塩釜の形をつくりて潮の水を汲みて湛えたり (古本説話集)

⑧ 宝殿のつま廻廊長くつづきたるに汐さしては回廊の下まで水たたへ…… (梁塵秘抄)

⑨ まなこの間の青蓮は四大海をそたたへたる (梁塵秘抄)

⑩ さみだれのころにしなれば荒小田に人にまかせぬ水たたへけり (山家集)

⑪ しのびねの涙たたふる袖のうらになづまらずやどる秋の夜の月 (山家集)

⑫ たしろみゆるいけのつつみのかさそへてたたふる水や春のよのため (山家集)

⑬ 信心の水をすまして利生の池をたたへたり (平家物語・巻二)

⑭ かしらのうちにはなつきまなくたたへたり (閑居友)

⑮ 温泉頂に沸して細煙かすかに立ち冷池腹にたたへて

洪流川をなす (海道記)

⑯ ……露の功德たまりて蒼海とたたへて善根林をなし

機感時を得て今生を生死の終とし… (海道記)

⑰ 瀧へオク法ノ水カミ潤ヲサバ契リシ言ノ葉モ栄ヘナム

(明恵上人歌集)

⑱ 人こふるなみだの海は都にも枕のしたにたたへてな

どやさしくかきて… (十六夜日記)

⑲ ……ふく風ふる雨のたよりに沈麿(ぢんじや)のに

ほひをたゝへたり (曾我物語・卷二)

⑳ 山のたゝずまる木深く池の心ゆたかにわたつうみを

たゝへ峯よりおつる瀧のひゞきもげに涙もよほしぬ

べく心ばせ深き所のさまなり (増鏡・第五)

㉑ 居たる所もしたゝかに拵へ四方に堀を掘て水をたゝ

へ八の櫓をあげて… (義経記)

㉒ 南都の大衆先陣は木津川に進み後陣はまだ興福寺の

南の大門にたゝへて老いた若いに七千余騎ほどお迎

ひに参るが… (天草本平家物語・卷二)

㉓ 一旦柵をつきあげてたゝへた水なれば雑人輩をつか

はいて柵を切破らせられい。 (天草本平家物語・卷三)

㉔ 九識の窓の前、十乗の床のほとりに瑜伽(ゆが)の

法水をたゝへ… (大蔵虎明本狂言集)

㉕ 東南より海を入れて江の内三里浙江の潮をたたふ

(奥の細道)

以上、管見に入る限りの辞書や索引類で捜し出した文

献上のタタフの例を列挙してみた。ところで、これらの

うち、⑭⑲⑳の三つを除く残りの二十二例はすべて

をつけたように、水、海、涙、潮など水に関するものに

対して用いられている。いずれも「いっばいに満たす」

とか「あふれるばかりにする」など他動詞として解釈す

ることができ、活用からいうと下二段活用動詞になる。

他の三例も水ではないが、⑭は「なつき(脳)」、⑲

は「沈麿のにはひ」、⑳は「南都の大衆」を対象とし、

やはり「いっばいに満たす」と訳すことができる。

ところで、動詞タタフは右に挙げたような他動詞下二

段活用の例ばかりではなく、「類聚名義抄」(観智院本)

に左のような訓があるところから、四段活用としても使

われていたことがわかる。

漲 タ、ヘリ

そして、文献を見ると、左に記すように、この四段活

用の例も上代から用い続けられている。

① 伊奘諾尊乃ち一片之火(ひとつび)を拳(とも)し

て視(みそなは)す。時に伊奘冉尊脹満(は)れ太

高(た)へり。 (神代紀・上)

② 諸の河充(ミ)チ溢(タ)、フ、漸次(に)転注し

て(於)大海に満(ち)ヌ(と)いふガゴトシ。

(地藏十輪經元慶七年歌)

③天即ち雨を降すに溝(ほりき)渠(みそ)泛(タタ

ヒ)溢(うか)び、原湿(さは)普く霑(ひ)び……

(天理本金剛誓若集驗記平安初期歌)

④……みどりごの たえずまねぶもきくごとに 人わ
ろげなる涙のみ わが身をうみとたへども みる
めもよせぬ みつのうらは……

(かげろふ日記・上)

⑤海ならずたたへる水の底までに清き心は月ぞ照らさ

む (大鏡・時平)

⑥みづたふ入江のまこもかりかねて空手(むなで)

にすぐるさみだれのころ (山家集)

⑦河にながす涙たはむみなと川あしわけなして舟を

とほさむ (山家集)

⑧あさくいでし心の水やたたふらむすみゆくままにふ

かくなるかな (山家集)

⑨山のなかにいたりて水(う)み(み)広(く)たへり。箱根の湖

となづく。 (東関紀行)

⑩きよみ川いづるみなとに潮満てばせかれてたふ浦

の入り(う)み (夫木和歌集)

右に挙げた諸例も、やはり水に関するものにタタフと

用いている場合が多く、すべて「いっばいになる」「満ちる」「あふれるばかりになる」「ふくれあがる」など自動詞として解釈することができる。

つまり、動詞タタフには、他動詞下二段活用のもとと自動詞四段活用のもととがあり、どちらも時代や作品による制限なく、かなり自由に用いられていたものであることがわかる。ただし、使用量からすると、下二段活用の例が圧倒的に多い。また、大半が水に関するものを対象としているところに、動詞タタフの特徴があるといえそうである。

ところで、タタハシという語は、この動詞タタフが形容詞化してできたものである。そこでこの動詞タタフー形容詞タタハシの関係のように、お互いに意味的関連性があり、形容詞の語幹がア段の音で終わっているものは、他にどのようなものがあるか、その例を挙げて、派生の仕方と意味上のつながりをながめてみることにしたい。以下、古語辞典を一通り見て選び出した七十程の該当例を、まず一括して表示してみることにする。入注5▽

番	動詞	活用と目	形容詞
1	アク(明)	他二自	アカシ
2	アサム(浅)	四自	アサマシ
			クク

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
カヌ (兼)	カダム (奸)	カカヤク (輝)	オゾム (強悍)	ウレフ (憂)	ウラヤム (羨)	ウトム (疎)	ウタガフ (疑)	イロメク (色)	イマメク (今)	イマフ (忌)	イドム (挑)	イトフ (厭)	イツク (齋)	イタム (痛)	イソグ (急)	イサム (勇)	イキヅク (息吐)	アル (荒)	アツカフ (扱)	アタル (当)	アス (樾)
下二自	四自	四自	四自	下二他	四他	四他	四自	四自	四自	四他	四自	四他	四自	四自	四自	四自	四自	下二自	四自	四自	下二自
カナシ (悲)	カダマシ	カカヤカシ	オゾマシ	ウレハシ	ウラヤマシ	ウトマシ	ウタガハシ	イロメカシ	イマメカシ	イマハシ	イドマシ	イトハシ	イツカシ	イタマシ	イソガシ (忙)	イサマシ	イキヅカシ	アラシ	アツカハシ	アタラシ (惜)	アサシ (浅)
シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	ク	シク	シク	ク

46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
ニアフ (似合)	ナヤム (惱)	ナマメク (艶)	ナツク (懐)	ナゲク (歎)	ツマル (詰)	ツツム (慎)	タク (長・闊)	ソネム (猜)	ソソク (噪)	セム (攻)	ススム (進)	スサム (荒)	サワグ (騒)	コメク (子)	コノム (好)	ココロユク (心行)	クル (暮)	クラム (暗)	クユ (悔)	クモラフ (曇)	キラフ (嫌)
四自	四自	四自	四自	四自	四自	四他	下二自	四他	四自	下二他	四自	四自	四自	四自	四他	四自	下二自	四自	上二自	四自	四他
ニアハシ	ナヤマシ	ナマメカシ	ナツカシ	ナゲカシ	ツマラシ	ツツマシ	タカシ (高)	ソネマシ	ソソカシ	セマシ (狭)	ススマシ	スサマジ	サワガシ	コメカシ	コノマシ	ココロユカシ	クラシ (暗)	クラマシ	クヤシ	クモラハシ	キラハシ
シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	ク	シク	シク	ク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	ク	シク	シク	シク	シク

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	
ワヅラフ (煩)	ヨロコブ (喜)	ヨル (寄)	ユク (行)	ヤヤム (疚)	ヤス (瘦)	モノオモフ (物思)	モドク (擬)	メヅ (愛・賞)	メタツ (自立)	マガフ (紛)	ホコル (誇)	フルメク (古)	フサフ (相応)	フク (更)	フク (更)	ヒトメク (人)	ヒク (引)	ハラダツ (腹立)	ハユ (生)	ネタム (妬)	ネガフ (願)	ニホフ (匂)
四自	四自	四自	四自	四自	下二自	四自	四他	下二他	四自	四自	四自	四自	四自	下二自	四自	四他	四自	下二自	四他	四他	四自	四自
ワヅラハシ	ヨロコバシ	ヨラシ	ユカシ	ヤヤマシ	ヤサシ	モノオモハシ	モドカシ	メダシ	メタタシ	マガハシ	ホコラシ	フルメカシ	フサハシ	フカシ (深)	ヒトメカシ	ヒカシ	ハラダタシ	ハヤシ (早)	ネタマシ	ネガハシ	ニホハシ	ニホハシ
シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	シク	ク	シク	シク	シク	ク	シク	シク	シク	シク

71	70	69
ラク (招)	エマフ (笑)	ワラフ (笑)
四他	四自	四自
ユカシ	エマハシ	ワラハシ
シク	シク	シク

量的に相当数あったものを右に五十音順に表にして掲げてみたが、表は上が動詞の例で、これを終止形で示しその下に活用および自動詞・他動詞の別を、それぞれ略号で記した。また、上の動詞と意味的につながりがあると思われる形容詞を、これまた終止の形で下に記し、ク活用・シク活用の区別も書き添えた。

例が多いので煩雑でわかりにくいかとも思うが、表を元にして動詞と形容詞の関係をながめてみると、その派生の仕方は次の三つにまとめて考えることができる。

まずその一は、圧倒的に数多く見られるもので、四段活用の自動詞 (exアタル) とシク活用の形容詞 (exアタラシ) という関係である。これは、四段活用の未然形がア段の音で終わる (exアタラ) ので、それに状態を表す接辞のシがつき形容詞化したもの (exアタラシ) と考えられる。八注6√つまり、動詞が元々存在し、そこから形容詞が派生したとする考え方で、四段活用でありさえすれば、自動詞ではなく他動詞であっても、このように考えることが可能である。(exアツカフ↓アツカハ(動詞未然形) +シ(接辞) ↓アツカハシ)

そして、表に記した四段活用動詞の例はすべてこの方式で、その派生の仕方をとくことができる。また、ここで生まれた形容詞はどれもシク活用のものばかりである。

二番目に下二段活用動詞を見ると、そのうちの何例かには、次のような考えをあてはめることができる。例えば、54のフクーフカシの場合、動詞のフクは下二段活用であるから、ア段の音が出ることはまずあり得ない。そこで形容詞の方をながめてみると、フカシの語幹フカは接尾語のサヤミがつけば、フカサ(深さ)・フカミ(深み)などと名詞化するし、タ・テ・ミルなど他の語が下につくと、それぞれフカダ(深田)・フカデ(深手)・フカミル(深海松)のように別の一語を形成することもできる。これはつまり、フカシの語幹フカの独立性が非常に強いことを意味しているので、ここでフカという語の存在が考えられる。このフカを語根として、右のような名詞が生まれる外に、接辞のシがつけば形容詞になり、また活用化すればフクという下二段活用動詞も出て来るというわけなのである。すなわち動詞から形容詞が派生したというのではなく、共通の語根があって、これが元になり、名詞や動詞または形容詞が出来たとする考え方である。

この方式で考えられるものには、前記54の他に、1、

3、6、29、36、39、50の七例が含まれる。いずれも接尾語のサヤミがつけば、名詞としても使われるし、明星(あかほし)、浅茅(あさぢ)、浅瀬、荒潮、荒栲(あらたへ)、暗がり、暗紛れ(くらまぎれ)、高城、高殿、高山、早歌、早川などの熟語も存在しているので、これらの形容詞では、語幹の独立性の強いことがよくわかる。また、この派生の仕方で生じた形容詞は、必ずク活用である点にも注目したい。

最後に、残る下二段活用の例については、次のように考えられる。すなわち、下二段活用のエ段の音が音韻変化を起してア段となり、これに接辞のシがついたとするのである。例えば、20のウレフで考えてみると、これは下二段活用動詞なので、ア段の音は出て来ない。しかし、ウヘーウハ(上)のように、へとハが音韻交替することから類推すれば、未然形ウレハがウレハとなることは時にあり得る。こうして生まれたウレハに接辞のシがついてウレハシという語が出来たとするもので、他に24(ネーナ)、60(デーダ)、63(セーサ)などもこのように考えることが可能である。尚、この場合は、形容詞が必ずシク活用で現れている。

以上、表を見て考察してみた結果、四段活用動詞のもの、すべて動詞を元にして形容詞が生じたと考えるこ

とができ、また、下二段活用動詞のものは、形容詞の語幹を元にして他の語が生じたとするものと、動詞の未然形が音韻交替を起したことから形容詞が生まれたとするものの二つに分類して考えることができた。

ところで、ここに四段活用でも下二段活用でもない動詞が一つだけ存在している。27のクユークヤシであるが、この場合、動詞のクユは上二段活用である。上二段活用でもア段の音は出て来ず、その派生の仕方を今まで述べて来た三つの型のどれかにあてはめて考えることは難しい。強いて言えば、未然形クイが音韻変化を起してクヤとなり、それに接辞のシがついたとすべきであろうか。いずれにしても、この一つを除けば、表で記した七十程の例は皆、右に述べた三つの方式のどれかにあてはめて考えることができ、しかも、それらは左のように、動詞、形容詞の活用別に整理されてしまう。

一、四段活用 —— 形容詞シク活用

二、下二段活用 —— 形容詞ク活用

三、下二段活用 —— 形容詞シク活用

さて、それでは本題に戻って、ここで取り上げているタタフータタハシであるが、これが右の三つの型のどれに属するかを調べてみたい。というのは、タタフには、既に述べたように四段活用と下二段活用の両方が見られ

るからである。この点からすると、タタフータタハシの関係は三つの方式のどれにもあてはまりそうだが、ただタタハシという形容詞はシク活用である。よって、二ではないことが、まずわかる。

そこで、一と三のどちらかということになるが、三の音韻変化はあり得ないわけではないけれども、やはりどこか不自然で、こじつけの感がする。また、意味的に考えても、タタフの場合、四段活用―自動詞、下二段活用―他動詞と明確に区別されているので、先に挙げた「日本書紀」などのタタハシの例から推して、「いっぱいに満たす」という他動詞的な意味よりも、「満ちる」という自動詞的な意味をとる方が、より適当である。

よって、タタフータタハシの関係は、大方の類例と同じく、動詞が元で形容詞が生じたという一の方式にあてはめて考えることができる。尚、タタフの外に、8、18、34、58の動詞にも、四段活用と下二段活用の両方が存在しているが、これらもタタフと同じように、四段活用動詞の方を元にして形容詞が生じたとする方が穩当な考えといえるように思う。

ところで、派生の仕方については、右のように判断したが、それではこの場合、動詞と形容詞の意味上のつながりはどのようになっているのか、続いてながめてみる

ことにしたい。まず、四段活用の他動詞から形容詞が派生した例では、「その動詞のことを希望する」「その動詞のようにしたい」という意味で形容詞を解ける場合が多い。例えば、5のアツカフ（扱）で見ると、形容詞アツカハシは「扱うことを希望する」「扱いたい」などの意味を元にして、「面倒を見ずにはいられない」の意に転じたものと思われる。同様にして、他動詞のものはいずれも右のように、未来のことを予測した、かなり動的積極的な解釈で解くことができる。尚、この解釈の仕方は必ずしも他動詞にのみ適用され得るとは限らない。

例えば、65のユカシは「どんな様子が見たい、逢いたい、知りたい」という意の形容詞であるが、「ユクことを希望する」意から出て来ているのは明らかであり、この場合、ユクは他動詞ではなく自動詞である。このように、自動詞の中にも、動詞と形容詞の関係を、他動詞と同じく強い調子で解釈できるものもあるが、総じて自動詞の場合、「その動詞の状態だ」とか「その動詞のように感じられる」など、いわゆる説明的に穏やかに解く方がふさわしい。例えば、22のカカヤク（輝）は「輝く状態」を元に「輝かしい」意の形容詞カカヤカシが生じ、33のサワグ（騒）は「騒いでいる状態」から「騒々しい」と転じて形容詞サワガシとなり、44のナマメク（艶）は

「なまめく感じである」から派生して「なまめかしい」「花やか、派手でなく、しっとりとして美しい」の意の形容詞ナマメカシが生まれたとするのだが、この例である。

以上、動詞と形容詞の意味的つながりについては、「その動詞のことを希望する」と「その動詞の状態だ」の二つに分けて考えてみた。さて、本題のタタフータタフであるが、この場合、タタフが四段活用の自動詞であることから推しても、「その動詞のことを希望する」よりも「その動詞の状態だ」の意味にとる方が無難のようだ。つまり、タタフが「いっぱいになる」と解せる語なので、タタハシの原義は、「いっぱいになっている状態だ」「満ちている様子である」ということになろう。そして、タタフにあてられた古辞書の漢字がほとんど「(さんずい)のついたものであることから考えれば、「いっぱいになっている状態」「満ちている様子」は、元々その対象が水の場合に限られていたものかもしれない。やがて、この「水がいっぱいになっている状態」のタタフが、水以外のものにも用いられるようになると、例えば「日本書紀」や「万葉集」のように人物をほめたたえるのに使われれば、「充実してたくましい」「満ち足りて盛んである」の義になり、「日本霊異記」のように下

の動詞を修飾して副詞的に使用されると、「十分に」の意味に派生して行く。尚、これら三文獻に見られた用例で判断すると、原義から派生した形容詞タタハシは、既に八、九世紀のころには、もう盛んに使用されていたことがわかる。

さて、こうして使われるようになった形容詞タタハシであるが、既述の三文獻以後はほとんどその例が見られなくなってしまう。調べ方が不十分なため、あるいは見落としがあるかもしれないが、私が見出し得た文献上の例は左のように少ない。

① 廿三日。やぎのやすのりといふひとあり。この人国にかならずしもいひつかふものにもあらざなり。これぞたはしきやうにてむまのはなむけしたる。

(土佐日記)

② ののしりてまうで給ひとのけはひなぎさにみちてたはしきかんだからをもてつづけたり。

(源氏物語・濔標)

③ 明石―濱―広ク瀝キニ直キ所ニテ祭ル也ケリ。

(今昔物語・十四ノ四四)

①は土佐の名族と思われる八木のやすのりという人がむまのはなむけ(銭)をした、その様子を述べたところで、タタハシは「いかめしく立派な」と訳すことができ

る。②は「河海抄」に「たはしき神たからとも 糺(タタハシキ) 嚴重也 或本いつくしきとあり 同心なり」とあるので、この場合も形容詞タタハシは「いつくし」と同義の「いかめしく立派な」の意で用いられていることがわかる。③でタタハシとよんだ漢字「瀝」は、元々「しずくがたれる、したたる」の義を表しているが、ここでは上の「広ク」と同じく、明石の浜の様子を形容しているのので、「満ちている様子である」というタタハシの原義にとるのが適当であろう。

右のように、文献に出て来るタタハシは用例が極めて少ない。また、意味的にはかたよが見られないが、用法の上では、どれも連体形タタハシキで用いられているところなどよく似通っている点に注目したい。

尚、古辞書でもタタハシの例は少なく左の二つに見られただけである。

傀 美也 威也 偉也 勢也 由太介志又太々波志

(新撰字鏡)

偉 タクマシ メツラシ アヤシ ウラム ヨム コ

モ ウレシ イカシ ウルハシ タハシク オ

ト、ケシ オムカシ (観智院本類聚名義抄)

「新撰字鏡」に出て来る漢字「傀」は「魁」と同じで

「大きい」とか「偉大なさま」の意味を表している。また、名義抄でタタハシの訓がつけられた「偉」は、既に「日本書紀」や「日本靈異記」でも出て来たが、漢字そのものは「大きくて目立つ」「美しく盛んである」の義を有している。「愧」も「偉」も共にイ（にんべん）のつく字であること、また、「新撰字鏡」での漢字の説明やユタケシというも一つの和訓、それに名義抄の他の訓などから考えれば明らかのように、形容詞タタハシはこれらの辞書では、原義の「水がいっぱいになっている状態」ではなく、そこから派生して、人の様子、しかもそれをほめたたえる場合に使われていた語であることがわかる。

このように、原義から離れて「満ち足りて盛んである」の意味で文献や古辞書に何例か出て来る形容詞タタハシは、現在では全く耳にすることがないが、「倭訓栞」にタタハシの項があること、浄瑠璃に「口やかましい、厳格である」の意でタタハシの例が存在することから推して、少なくとも江戸時代には、まだ死語とはなっていないが、少なくとも江戸時代には、まだ死語とはなっていないが、多少変化に富んだ用法の見られた形容詞タタハシが、以後の文献や辞書の類でほとんど例が出て来なくなってしまうのは、むしろ不思議な気さえする。

これは、タタハシの代わりに、タクマシ、ユタケシ、メツラシ、ウルハシ、イカシなどの類義語が用いられるようになったのも一因であろうが、その他に、上代では理想像であったタタハシキ男性が、中古に入ると時代の好尚が影響して、さっぱりもてはやされなくなってしまい、それに伴ってタタハシということばそのものも、だんだん使われなくなって来てしまったと言えるようにも思うが、果たしてどうであろうか。

尚、タタハシの語源を「賞讃に値する」というのが原義で「讚ふ（たたふ）」と同語源とする考え方がある。△注7▽「讚ふ」は下二段活用他動詞で「（言葉で）満ち足りるようにする」の意を有する語であるから、同じ下二段活用他動詞の「湛ふ（たたふ）」とは意味的な関係が認められよう。しかし、形容詞タタハシは、既往のごとく、四段活用自動詞の「湛ふ」から派生したもので、その原義を直接的に「讚ふ」とするのは、不適當と思われる。やはり、タタハシの原義は「水がいっぱいになっている状態」であろう。

以上、今号ではタタハシクという語を取り挙げ、さまざまに述べ立てて来たが、大方のご批判を仰ぎつゝ、とりあえずこゝで筆をおくことにしたい。

△注1▽ 「日本靈異記訓釈」(遠藤嘉基著、昭和五十七年五月三十日、和泉書院発行) 二十二ページ参照

△注2▽ 「日本靈異記」の定本として用いたものは岩波古典文学大系の「日本靈異記」(昭和四十六年八月二十日発行)である。

△注3▽ 「日本書紀」の定本として用いたものは、岩波古典文学大系の「日本書紀」上(昭和四十二年三月三十一日発行)である。

△注4▽ 「万葉集」は定本として岩波古典文学大系の「万葉集」一(昭和三十二年五月六日発行)および三(昭和四十年一日十五日発行)を用いた。

△注5▽ 参考にした古語辞典は「岩波古語辞典」(昭和四十九年十二月二十五日第一刷発行)であるが、一通りザッと目を通しただけなので、あるいは遺漏があるかもしれない。

△注6▽ 形容詞の活用語尾シを接辞とする考え方は、若干の辞書の他、左の書などにも見えている。

。 「国語学研究事典」(明治書院) 三三六ページ

。 「日本文法大辞典」(明治書院) 二〇〇ページ

。 「形容詞活用の成立」山口佳紀(「国語と国文学」昭和四十八年九月号)

。 「形容詞の発達」山崎馨(「品詞別日本文法講座、形

容詞・形容動詞」六十ページ)

。 「形容詞性述語の史的展開」西尾寅弥(「講座日本語学、文法史」七十六ページ)

△注7▽ 小学館古典文学全集「日本靈異記」(昭和五十年十一月三十日発行、五十七ページ頭注)